

ソ連・ハバロフスクより脱走

愛媛県 小野 萬太郎

昭和二十(一九四五)年八月二十日

通化輸送司令部より連絡ありて、通化駅より病弱者、軍属の家族等は朝鮮平壤まで帰ることになった。

八月九日より、生死を共にした連中とお別れすることになった。(二十四人ぐらい)

汽車に乗り込んだ者を見送りしたのは午後四時ごろだった。輸送指揮官川崎大尉は男泣きに泣いていた。

まだまだ兵隊は敗戦を正式に知らされていないので懸命に頑張っていた。午後四時過ぎ通化駅を出発し、佐賀村開拓団に向けて夜行軍した。十時ごろ到着した。今夜は露営のため天幕を張り、夕食を白炊し終わったのは午前一時を過ぎていた。

八月二十一日

午前八時、佐賀村開拓団前広場にて部隊長中村中佐

殿より、「八月十五日付、大日本帝国は、米、英、支、ソ四カ国に対し無条件降伏の旨、天皇陛下よりのお言葉あり」と発表された。全員涙の一日を過ごし、夢も希望もなくなった。

部隊行動に対して不思議な点多数あり、気がついていたが、まさか敗戦とは……？

今日はニュース発表後休養。洗濯、入浴(ドラム缶製風呂釜)、部隊手持ちの甘味品、酒、ビール、全部出して一同会食した。今夜もこの地点で野営した。

部隊長中村中佐
戦闘大隊長 進藤少佐以下四〇〇人

自動車中隊長 石川少佐
川崎大尉
小野伍長以下五〇人

八月二十二日

今日は武装解除の準備。兵器弾薬、員数点検(八月十五日大量投棄したので残量の点検)。

夕食後、朝陽鎮に移動のため当地を出発するも、途中大雨のため増水して道路不通となり、また開拓団に

引き返す。大雨と夜のため、真っ暗の中で非常に苦勞した。天幕を張り床についたのは零時をはるかに過ぎていた。(天幕野営)

八月二十三日

本日早朝、再び佐賀村を出発、朝陽鎮に向かった。到着は正午ごろであった。日本人国民学校に宿営することが決まった。

本日午後、ソ連軍の軍使が白旗を高く立てて朝陽鎮に來た。そこで軍使に対して日本軍(我軍)は武装解除し、自動車、兵器、被服、人員数量及び帳簿等、一切ソ連軍に引き継いだのは午後三時過ぎであった。自動車の引き渡しは後日となった。

日本軍人として二十一日の無条件降伏、本日の武装解除、泣いても涙も出ない心境だ。日本国民、軍人共に史上最悪の不名誉である。一生涯を通じて忘れることのできない今日の姿。ああ残念、残念。

八月二十四日

別命あるまで朝陽鎮(現在地)にて宿営すると言っていたが、また海龍に移転とのことで、今までどおり

自動車にて出発し海龍に向かった。

朝陽鎮、海龍は中都市で、日本人も多数いた様子であった。

八月二十五日

自動車で梅江口駅前貨物廠へ食糧受領に行く。驚いた。貨物廠とは、あらゆる品物を保管する場所であるにもかかわらず、我軍の被服、編上靴、燃料、毛布、その他、山の如く積み上げて焼却中。実に見るからに涙が溢れてくる。

あの山、この山、何か所も火の海と化して、敗戦のみじめさを身をもって味わって來た。この目で見つめた。

日ごろは節約、節約と兵隊に厳しく言ってきたのに、ここでは、こんなにたくさん火をつけて灰にするとは、残念、残念。

見渡す限り、単葉二人乗り飛行機が縦横一直線に並び、我が軍の赤とんぼ部隊の跡が整然と残っていた。一見して五百機くらいあると思うが、みな火をつけて灰にしていた。日本魂もこれでご破算だと思った。実

に口や言葉に表すことのできない現況。

八月二十六日

前日に続いて、本日は朝から自動車で貨物廠に行き遊び回ること一日じゅう。この日、私は重大決意をした。それは、敗戦、降伏、武装解除、次は内地に無事帰ることの準備をすることである。

夕方ごろより脱走のための身の回り品、自動車、燃料、食糧、毛布等、指揮官車に積み込む。当分野宿覚悟の準備完了をした。

貨物廠より部隊へ帰ってみると「午後六時、ソ連軍命令第一号、関東軍将兵は明朝午前八時、吉林駅前広場に集結すべし」と。命令によるソ連行、準備のため目が回るほどの多忙さだった。

三度目のショック、いても立ってもいられない気持ちでいっぱい。兵隊皆が、涙ながらに死の旅の準備完了したのは午後十一時過ぎだった。死刑宣告と同じで、床についても寝る者はいなかった。

八月二十七日

午前六時、自動車で海龍出発、吉林駅前には八時

着。

ソ連軍は待ちかねていたように、自動車もろとも我等を汽車（無蓋車）に乗り込ませた。

やがて、どこへともなく列車は動き出した。どうすることもできない。捕虜の身で、ただソ連軍のなすがままに身を任せなければならないのが残念だった。

そのうち十時間が過ぎ、二十時間が過ぎ、広い広い原野、見渡す限り続く山一つない野原だけ。列車内では、ときどき配られるパン食、手持ちの食糧等食べ尽くしてしまつて、夜となく昼となく車内で寝転んで時をかせぎ、四日くらい車中にいたと思う。

山越え、野越え、異国の地に我が身を移動することの精神的な苦痛は何とも例えようがない「ヤケツバチの心境」だ。

長い長いソ連行、死の旅だった。私はこの間も脱走の企てを頭から離さず、実行のチャンスがうかがったが、なかなかチャンスがないまま目的地に着いてしまった。ハバロフスク地区だと思う。午後八時ごろ下車命令、宿舎準備が始まった。戦友達は指示に従って

食事の準備、天幕露営と大混乱。すべてが初めてのソ連の地である。周囲も真っ暗であった。

八月三十日

真夜中、不気味な空気が身を切るように感じた。誠に感無量である。決心に決心を固めて無言のうちに「戦友よ、さらば。元気でやれよ」と心に念じて脱走に踏み切った。時刻は八月三十日の真夜中。乗りなれた愛車は一路鉄路に沿って走り始めた。目指すは釜山。経路は、○○地点ハバロフスク、イマン、虎林經由、牡丹江、ハルビン、新京（長春）、朝陽鎮、通化、京城（ソウル）、釜山であった。

この経路は、日ごろの部隊用務中も、地図と磁石を身につけて単独走行の訓練を心掛け、いわゆる通られた道路で走行に自信があった。予定通り約六十時間くらい、夜となく昼となく、所かまわず走り続けて南満通化街に夕方到着した。この間、襲撃、暴行等再三出遭ったが、捨て身で強行突破した。まるで夢のようだ。人間業でないと思う。常に古里の氏神様、弘法大師、般若心経等心の奥で唱えていたことを覚えてい

る。ありがたいものだ。本当にありがたいものだ。

脱走用車はニッサン180型、指揮官車、積み込み荷物はガソリン三ドラム、モービル油一ドラム、食糧米四〇キロを三〇カマス、副食品二丁、毛布百枚、被服多数。これは、途中で山ごもりしても一年ぐらい生活できるための準備であった。

今夜（九月二日）は通化の町で一泊することにしたのは、この地方の状態を見るためと朝鮮に渡る準備のため、ある日本人経営の自動車会社に車を乗り入れた。看板は佐藤洋行自動車株式会社とあった。社長は四国徳島県出身であって、トラック営業とバス営業を経営し、その夜、私が奥さんからいろいろとお話を伺い、大変ごちそうになりました。社長及び日本人運転者は終戦と同時にソ連に連行されたということで、あとは満人系及び朝鮮系運転者が車を全部持ち帰って営業は全部停止してしまったとのこと。

奥さんから、日本に連れて帰ってくれるよう頼まれた。しかし、我が身の安全さえ見通しがついていないので、返事はできなかつた。誠に身を切られる思いが

した。

屋外の様子は異常に悪かった。ソ連の戦車が夜通し通り、満人系自警団等が往来して、日本人多数が殺されたとのこと、すでに通化の町も無法地帯であった。

九月三日

佐藤洋行で周辺のニュースを取材した。

1 通化の工兵隊の隊長が敗戦の責任をとって自決したとのこと。

2 小学校の校長先生が現地人に割木で殴り殺されたとのこと。

3 日本女性は集団で夕方になると山中に逃げ込んで、山で野宿する。夕食後、ソ連の兵隊が女性を集めに来るからだ。このとき、乳児はソ連の兵隊が取り上げて土間に投げつける。

4 若い女性が髪を五分刈りにして男装している。

5 略奪、暴行、虐殺等で家にはいられないため、日本人は国民学校、お寺、公民館等で集団生活している。

6 盛夏の候、飲まず食わず、疲れ果てた母親が発

狂して我が子を殺し、父親が首を吊るような話が珍しくなかった。

7 日本人は妻子と生き別れ、兄弟別々の生活がこの日から始まった。

8 新京の避難民収容所では、チフスのために千二百人くらいが死亡したとのこと。

敗戦のため満州だけで百二十万人といわれた人が、ひとしく牛か死かをさまよった姿を、口や言葉に表し切れない現状を私はこの目で見た。満州と朝鮮の国境鴨緑江岸にソ連兵が多数集結しているらしいので、私は愛車を佐藤洋行に置き去りにして徒歩を決意した。鴨緑江には鉄道橋、国道橋、渡し舟等交通を確認したが、いずれも日本人が通れない。

九月四日

二泊とも大歓待を受けた。本朝出発の予定なるも、奥さんに泣きつかれて助けてくれと言われるので全く思案した。そのとき、トランク二個のお金を出してきた。一個あげるから日本へ連れて帰ってくれと言う。

私も本当に気の毒に思うが、さて我が身自身の危険を

感じて一刻も早く佐藤家から離れたかった。大変お世話になったが、単独で出発に踏み切った。午後のことだった。飛行場の横道を山へ山へと幾山河の旅に出た。

命がけで南下し真つ暗闇の道を朝鮮方面へと、山越え野越え悪戦苦闘二十時間くらい歩き続け、敗戦の将兵何も語らず、この哀れな姿を誰に伝えよう、見せよう、聞かせよう。生米を手に噛みながら、休むことなく歩き続ける。二晩目、三―四時間大きな松の木の下の野宿し、また歩く。馬力を出して駆け足するも山また山、四方見渡しても光一つ見えない山奥、食わず飲まず南下、約十里くらい、野宿しまた歩く。

九月六日

夜となく昼となく、ただ歩け歩け、ひたすら目的地釜山に向かって、飲まず食わずに歩く姿のいじらしさう……。

山ふもとに見えた小さな畑にトウキビがあり、これをもぎ取り生のままかんだ味は一生忘れることのできない味がした。

夕方、ある部落が見えた。それは明石部落とわかった。日本人経営の紡績会社があったが廃業の様子。この部落で朝系保安隊員三人に出会う。「こらイゴサルミン、日本人、お前は兵隊だろう、日本へ帰ることはできないぞ」とおどされて、「金を出さぬと殺す」と言うので、十円札五枚出して命だけ助けてもらった。怖くて、また山中に飛び込んで野宿することにした。日本へ帰るのはいつの日やら、せめて満朝国境までもとがんばる敗戦兵士。ああ残念、残念。

九月七日

一眠りしたら、寒さとすき腹で後は眠れない。まだ暗かった。朝、谷間に行き、水など一杯飲んで歩き始めた。ところが足が痛くて……足全体が水ばれしていた。でも歩く以外に仕方がない。どうしても日本へ帰りたい。ここで死んだら本当の犬死にだ。頑張って、頑張ってと心にむち打って一里ほど歩いたが、足がしびれてしまい、まるで他人の足のようだ。今日は約五里くらい歩いて野宿することにした。ここは南満州山脈の連山が重なるように奥深い山岳地帯、見渡す限り

の森林であった。

九月八日

野宿から覚めると服の外音が霜でぬれていた。身肌は汗と汚れて寒気がする。少し歩いて街道に出た。

ちょうど通りかかった満人系の馬車(マーチヨ)に乗り込んだ。馬車に乗って十五里くらい走り四十円支払い、国境の町鴨緑江岸の興亜の町に到着したのは午後六時ごろであった。人口も相当あるように感じた。

町の光が美しく見えた。第一の目的地に來たと勇氣が出て、食事を買い求め腹いっぱい食べた。だが、ビクビクしながら食事したので味などわからず、ただ満腹感だけが取り柄であった。

いよいよ目的の川を越すために興亜の部落を南北に往来して調べ上げた。

渡し舟があるけれども乗る気がしなかったのは、保安隊に見つかったら大変なことになると思ったからだ。しかし他に方法はなかった。まさか橋を渡る気にもなれず、午後九時過ぎ、ひとまず鴨緑江川岸の高梁畑で野宿することに決めて、明朝、川を渡ることにし

た。

現在地は満州・朝鮮国境鴨緑江北川岸です。

九月九日

早朝少し明るくなる五時ごろ、鴨緑江に命がけで飛び込んで泳いだ。川幅が百メートルくらいあった。水は川幅いっぱいあった。二十分くらい泳いで向こう岸に着いた。「ここは朝鮮だ」と一人で叫んだ。思わず声が出た。

早朝なので、寒くて全身にガタガタ震えがして服が着られなかった。服もずぶぬれだった。無理に服を着て走り出した。

午前十時ごろ、朝鮮満浦鎮という町で金銭交換をしなければと、満州銭との交換を朝鮮人に依頼した。手数料として二割天引きされて、小銭で四百円くらい手にして南朝鮮に向かった。すると、珍しくもマクワウリを売っていたのでこれを買ってかじりながら歩く。途中、トラックに便乗した。一時間くらい走ると朝鮮自警団に差し出された。ソ連軍に引き渡すと言っておどかさされて、罰金として十円札一枚差し出してお断り

申し上げて、やっと通り抜けた。

江界約一里くらいの地点で農家の一軒家に宿泊することにした。トウキビ飯を腹いっぱいごちそうしてくれた。悪い人ばかりではなかった。本当に親切にくれてありがたかった。家族四人暮らしの家であった。

九月十日

話によると、ソ連軍が約一万五千人ほど江界を占領しているとのこと。朝七時ごろ出発。江界周辺を大回りして山越えに大きな川を渡った。ソ連兵に二、三度出遭って冷感を味わった。夜間、山路を南下する。道に迷って元山方面に五里歩いて気がつき、またこの道を引き返す。この時、疲労と足の痛みで、死んだ方がましかと思つたことが何度もあつた。全く死にもものぐらいとはこのことか。

しかし、体にムチ打つてまた歩く苦難苦闘である。今夜は北朝鮮山脈中腹で石枕で寝た。

九月十一日

相も変わらず山脈の中を歩く、意外に何も無い。目

指すは日本へ日本へと、唯一人の父親を思い出し力づけ、自分に勇気をつけて歩き続ける毎日。幾千里、幾山河の旅路、果てなしの旅。夜となく昼となく、山中腹に、子供が死んで松の木に縛りつけられているのを幾度も見た。引き揚げ途中、飢えて死んだ子供だらう。食物一つない山の中、子供が死ぬのは当然のこと。深い谷間では、日本人らしき死体等もあつた。この目で見た。空腹と疲労、一度寝て覚めたら、後は寒さと飢えて眠れない。野宿の悲劇の繰り返し、これが本当の地獄というものか。

九月十二日

今日も早朝より南朝へ南朝へと歩く、足の痛みも忘れて一生懸命。夕方七時ごろ、別加里部落に到着する。

一軒の大きな材木店を訪ねてみると、日本人経営の三木材木店であつた。出身地は新潟県の人であつた。当家に一泊させてもらふこととなつた。白い飯を腹いっぱいごちそうになった。また、美しく柔らかいふとんの中で久しぶりに寝るありがたさ、本当に好意に

あずかって腹の底から嬉しかった。

九月十三日

疲れてよく寝たため、朝十時に出発した。

しばらく歩くと、同じ別加里部落でまた日本人らしい住宅を見つけたので訪ねてみた。この家の主人は請負人で、三重県出身、親子三人暮らし、来朝四十年の歴史の持ち主であった。足が痛いのと体もだるいで、昼過ぎのまだ日が高い時刻であるが、余りの親切に甘えて一泊することにした。大変お世話になりました。

九月十四日

朝七時ごろ、別加里を出発。午前中四里くらい歩いて、昼食のために日本風の家に立ち寄り、早速ごちそうになった。この家は刑事の宅であった。ご主人は、終戦と同時に鮮人多数に割木で殴り殺しにされたということで、奥様始め家人は戦々恐々としていた。日本人は満州、朝鮮では学校の校長、村長、警察、郵便局長などの要職についていたので、停戦になってから鮮人が集まって校長先生を割木で殴り殺した話も広がっ

ていると、奥さんが涙ながらに語っていた。お話を聞くとお気の毒で、いても立ってもいられない気がした。一泊してくれと言われるのを振り切って歩くことにした。

こんな話を聞くと、精も根も尽き果てながら、また日本を思い出して勇気を振るい起こし、痛む足を引きずりながら次の部落で朝鮮系の旅館に一泊した。

九月十五日

朝七時ごろ出発、再び南鮮へ南鮮へと勇気を出して懸命に歩いた。命の続く限り馬力を出して……。

夕方、前川に到着した。日本人系の材木店があったので立ち寄った。なんと、この材木屋が愛媛県越智郡出身であった。この地で同県人と出会うなんて、神の引き合わせかと思った。また親に出会った気もした。本心に心から嬉しかった。白い夕飯を腹いっぱいごちそうになった。食事の後で私の語る身の上話、また当家の話も続く中で、楽しい一夜を明かした。

九月十六日

早朝、前川出発、起川に向かう。夕方まで馬力を出

して歩いた揚げ句、北鮮系自警団にて引揚者証明書をつくり汽車に乗車することができた。このとき、金を

二十円支払う。午後八時ごろ、起川到着（終着駅）。

駅裏の鮮系の民家に一泊の話し合いができた。門造りの立派な旧家であった。この家は年寄り日本語を知らず、子供が日本語を話せるので子供の通訳で話し合いをした。なかなか親切にしてくれて、ありがたく思った。子供が日本の京都に留学生としていたことがあると言っていた（十七、十八歳くらいの女の子）。

九月十七日

午前八時ごろ、証明書を起川駅に見せ貨車に乗車した。汽車は南鮮へ南鮮へと走り、介川、順川經由、午後十時ごろ平壤駅に到着した。鮮人とともに貨車内で一夜を明かした。

九月十八日

朝になってみると驚くなかれ、駅もホームも町もソ連兵がいっぱい溢れるばかり。ちょっと見ただけでも三、四百人くらいいた。鮮人に変装していたので？……、女は男装になっているのが多く見受けられた。

現在地点は平壤駅構内。

午前十時ごろ、汽車は南鮮に向けて出発した。沙里院經由、新幕にて列車内で北鮮系警乗員に尋問されて日本軍人と見破られたら、ビンタ取られ汽車から突き落とされた。平身低頭何も語らず南川方面に向かって歩き始めた。汽車に乗ったのは夢のようであった。

再び南川駅より汽車に乗車することができて、夕方、金邱駅に着いた。ここは終点とわかった（三十八度線）。

金邱とは北朝鮮（ソ連領）、開城とは南朝鮮（米領）。金邱はソ連軍の警備が一層厳重であった。

同志の顔が見えぬくらい暗かった。それを利用して南鮮人に変装して開城に向かった。ところが途中、北鮮系自警団が多数出てきて、被服、金銭、時計等身の回り品全部、略奪された。再三出てきたので非常に困ったが、後には取る物もないのでビンタまで取られた。忍びがたきを忍び、耐えがたきを耐え……。生きる気色はしなかった。でも、最後の関所らしく感じた。北鮮の山岳地帯は日本人の乞食の行列が続く中

で、子供と弱者は餓死する。まるで日本人の消耗の地であった。

九月十九日

三十八度線を夜通し歩いて早朝、開城に到着した。開城には米軍の国旗を立てていた。米軍の歩哨線を越えて開城入りをした。何か手の平を返したような姑息な気がした。米兵の行動、住民の態度、何か静か落ち着きが見られた。この周辺の様子を知るためにある日本人宅に身を寄せた。このとき、食事も腹いっぱいごちそうになった。米軍下の話を聞くと、本当にありがたく感じた。今までは同じ朝鮮でありながらソ連軍はこわかった。

これでやっと大手を振って歩けるようになった。

【執筆者の紹介】

小野萬太郎さんは、愛媛県新居郡金子村字原で、農業、父小野重吉氏、母ヨシノさんの九人の子供の次男として、大正二年十一月一日に生まれた。今年で八十八歳になられる。

高等小学校を出て人絹会社に勤めていたが、若いときから自動車の運転手を志していたので、昭和九年退社して市内の運送会社に入った。苦勞して貯めた預金を持って昭和十一年、徳島県自動車学校に入り、一回の受験料五円を払い試験を受けたが三回駄目で、昭和十二年八月に四度目の試験で苦勞の末、大型免許証を入手することができたときは鬼の首を取ったような気持ちであった。その前、昭和八年五月十二日に徴兵検査を受けて甲種合格の籤^{くじ}逃れで昭和十二年十二月末、住友鉱山KKに入社しましたが、昭和十三年十二月、善通寺第十一師団輜重隊に入隊。翌十四年四月除隊。住友鉱山に復帰。

昭和十六年七月十五日、再度召集(関特演)。香川県詫間港より戦艦陸奥にて釜山港、朝鮮を経て新京第百部隊着。虎林・東安にて国境警備につきも、小野さんは兵でありながら自動車隊の責任者として運転技術を兵に教育して、二十年八月十日には伍長となり、終戦、抑留となり、ハバロフスクに到着した八月三十日までのたった四日間の強制抑留であったが、満州時代

の長年の愛車ニッサン180型トラックにてガソリン
ドラム缶三個、エンジンオイル ドラム缶一個、米
四〇キロカマスを三〇袋、毛布百枚、副食品、被服多
数を満載して単独で逃亡し、ハバロフスクからコル
フォースキ、ビキン、フィチエフカ、エンタチェフ
カ、イマンを経て満領、虎頭、虎林、東安、鷄寧、牡
丹江、ハルビン、新京、伊通、朝陽鎮、通化、明石、
興亜を通り鴨緑江を泳いで渡り、北朝鮮を十日間彷徨
して三十八度線を突破したのです。

氏の強靱なる精神力と体力、鋭敏な頭脳なればこ
そ、二十日間の脱出行が成功できたのではないでしょ
うか。

南朝鮮へ入り、京城から故郷新居浜市まで十一日の
旅程でたどり着き、満四年ぶりにてお父さんや家族と
再会することができたのです。

帰国してから住友鉱山に再び復職しましたが、期す
るところあり、勤続二十年目の昭和二十九年に円満退
職して、念願の「タクシー会社」の経営者としてス
タートをせられました。それもこれも、シベリア脱出

とタクシー会社設立は、俗に「芸は身を助ける」とい
う言葉がありますが、それ以上に「芸は道によって賢
し」により、関東軍の四年の軍隊生活も、四カ月の臨
時召集も、教えられる方でなく、二百人の運転者を育
て上げた力量は、長い軍隊で「ピンタ」を受けた経験
がなかったという笑い話でもあります。

タクシー会社の経営も順調で、若い人の結婚の媒酌
も御夫婦で六組も、また教育方面にて新居浜市内に新
しい高校新設の御努力を、氏神宗像神社の顧問とし
て、陸運業の面にては県警本部長より、県安全協会長
より、農協に、町内会に、部落に、あらゆる方面に貢
献された御努力に対して各方面からの感謝状、表彰
状、また地域振興功労者として、県知事さん、市長さ
んからも表彰状を受けておられます。
愛媛支部の会員として熱心に御協力をいただいてお
ります。

(愛媛県 山本 繁夫)